

『貧福論』の意図

金田文雄

究史は概ねこの線にそってなされてきたであろうし、本論考においても「貧福論」の意図を中心に探ってみたいと思う。

二

一
雨月物語全五巻九篇の巻末に位置するこの作品は、まず題名に見られるように他の諸篇とはそもそも異質性を持つものである。「一論」とつけられたものは秋成の物語作品の中ではこの一篇を有するのみであり、他には見られないものである。とりわけ伝奇的な傾向を強く持ち、また篇名にも工夫のこらされた雨月の他の諸篇の中にあっては本篇の持つ位置は特異なものである。またその特異であることの質が多分に知的要素の強いものであり、岡左内と黄金の精霊との対話形式を主軸として展開されるその作品の形象性は、そのままで高いものとして評価することは困難でもあった。こうした点に關して重友毅^{注(1)}氏は

- (i) 怪奇性にとほしい
- (ii) 抽象的議論に終始し、知識にうったえるものが多すぎる
- (iii) 問答体をとったこと

の三点にまとめ示摘され、ただそうした物語作品としての明らか
な欠陥とは別に、本篇をそのためにしりぞけることに對しては警告
を發し、その意図をさぐるべきであるとされた。以後この作品の研

雨月物語は周知のごとく主として中国白話小説にその材をとった
翻案小説であり、そのかぎりにおいては全九篇はともに多かれ少
なれそうした性格を持ったものであるといえる。他の諸篇ではお
おむね「剪燈新語」「五雜俎」あるいは「今昔物語」「源氏物語」な
どをその主たる典拠としているのであり、原典にも伝奇的な要素を
持ったものが選びとられていたといえるであろう。またそのために
各篇の物語において設定されている時代状況も概ね中世に置かれて
おり、いまだ固定化しない社会状況の中で自由に物語的発想を展
開せしむるような工夫がなされていた。ところが本篇の原典としてこ
れまでに指摘されてきたものは、これまた他の諸篇と比した時、著
しく異質なものであり、同時に時代状況の設定も近世初頭に置かれ
ていることも注目される点である。ここではまずそれらの原典及び
先行作品を検討することからはじめたい。

まず最初に岡左内に関してであるが、彼は実在の人物であるらし

く「常山紀談」「翁草」の中にそれぞれ左内についての記述を見ることが出来る。^(註②)これら二つの資料では左内に関してほぼ同様のことを伝えており、

- (i) 金銀を數並べて、その中にふして慰みとしていたこと。
- (ii) あらそいの仲裁に正宗の刀をさげて出かけていったこと。

- (iii) 馬取の中間が黄金一枚を持っていると聞き、これを賞しほうびをとらせたこと。

に集約されるものである。両方の記述はともに当代の一奇士として描きながら、左内に対してある意味での評価の概念がこめられているといつてよいであろう。このうちで秋成は「貧福論」においては(ii)のエピソードをとらなかつたのであるが、基本的にはこのままに生かした設定を行っているようである。ただあらそいの仲裁といつたエピソードをとらなかつたことについては本篇が究極左内の人間像を描き出すことに目的を持たず、黄金の精霊の論の方にその中心が置かれていたためであろうし、したがって(iii)のエピソードも黄金の精霊出現の直接の動機として

君が今日家の子を賞し給ふに感^{あは}ず、翁が思ふこゝろはへをもかたり和^{なぐさ}まんとて、假に化^{かたぢ}を見し侍^はるが^(註③)

のように用いられたにとどまつたのである。なお左内については秋成自身この雨月物語執筆以前に『世間妄形氣』三之巻「武士^{ものぶ}の矢たけ心もつまる所は金」にその名が見え、以前から注目していたことがうかがい知れるようである。つまり本篇の成立については、こうした左内の人間像に対する秋成の関心に着想の出発点を持っていたと考えることができそうである。

次に本篇の主人公ともいうべき黄金の精霊についてであるが、これまた他の諸篇に見られる霊と比べた時一読してきわめて異質であることが確認される。他のものは例えば同じような問答形式をとつた「白峯」の崇徳院にしても、その怨霊となつた姿は霊であるが故にこそ強大な力を發揮していくのであり、またその形相もそれぞれにすさまじいものである。ところが一方でこの「貧福論」の精霊は「ちひさげなる翁の笑をふくみて」「ほうけたるさま」と形容されているのである。この黄金の精霊の直接の典拠は確認しがたいが、今昔物語集巻第二十七「冷泉ノ院ノ水ノ精成人形被^ま捕語第五」、同じくこれに続く銅の霊などがヒントになつたであろうとの指摘がなされており、^(註④)もの霊といつたことは先行作品の中にもかならずしも例のないことではなかつたようである。また秋成自身の描いたものとしては晩年の「胆大小心録百四十二」などにも金の性の表記が見られるが、同じ近世期のものとしては、物の精霊とはいい難いものの、例えば『日本永代蔵』巻四の一「祈る印の神の折敷」などに見られるように西鶴の浮世草子の中にしばしば神の人格化の例が見られるのであり、「貧福論」の黄金の精霊もイメージの上からはこれらに近いものであるといえそうである。

ただ雨月物語の中心主題を、人間の原質性へ廻行し、そこに内在する性^{さが}の発見に求めるとすれば、他の各篇においては「蛇性の姪」の真名子をのぞいてはすべて人間の魂が霊化したものとして描かれているのであり、またその唯一の例外たる真名子にしても秋成が女性のある本質をそもそも蛇性に見ていたと仮定するならば、本篇が最初から黄金の精霊―すなわち人間の裁量からは全く無縁の存在―として登場してくる点において、構想上において大きな相違点をこ

こに見ることができるのである。

一方、本篇において展開される経済論については、その原典として概ね史記の貨殖列伝からとられていることは、すでに早くから指摘されてきたとおりであり、すでに定説化されているようであるが、ここでは問答形式に関する先行作品を検討してみたい。

直接の先行作品として考えられるものとしては寛延二年刊行の「英草子」が目につく。この作品も全体が中国白話小説等に材をとったいわゆる翻案怪異小説であるが、その中に見られる第三卷「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」が、形式上やはり同じように物語化はなされているものの、主として問答体がとられており、知的觀念内容がその中心をなすものである。

これら一群の前期読本として今に分類される作品が登場する以前は、浮世草子が「形氣もの」と呼ばれる形式の中で世俗の諸相を視覚的にとらえること、そしてその中にある類型をとらえようとすると、また内的にはこれにあきたらない高踏的ないわゆる文人意識の発性ととも、学識の被歴や知的觀念、あるいは批評精神に中心を持つような作品が生まれてきたのである。翻案小説であることはとりもなおさず当時の知識人層に対して、その原典を暗示し、同時にいかにそれを換骨奪胎しえたかに作品生命がかけられてきたのであり、先掲の「英草子」にも見られるごとく秋成のそれも、当時の時代状況の中ではむしろかならずしもそれ自体としては特異なものでもなかったとも言えるのである。

次に秋成自身の物語に見られるそうした傾向についてであるが、形式においては「ぬば玉の巻」がほぼ「貧福論」と同様のスタイル

をとっていることが注目される。「ぬば玉の巻」はその序に見られる城崎滞在中の執筆ということから安永八年頃の成立と推定され、すなわち兩月刊行の三年後のものであるが、ここでは宗椿と人麿との問答形式をとりながら、主として源氏物語論を中心に秋成の物語観が人麿の口を通じて語られている。また構想の上からも宗椿と左内、人麿と黄金の精霊とはほぼ同様の役割を有し、前者が通説のつとった質問者、後者がこれに対して独特の論において答えるという形をとっているのである。さらには後年の「春雨物語」においても「海賊」で貫之と文屋秋津を配して、歌論・管公論などがやや未整理の形で、これももっぱら貫之を物語の仲介者としながら主人公秋津によって語られている。こうしたことから、この問答形式をとったものはいずれも作品としての形象性の度合いはやや低いものがありながらも、晩年まで持ち続けられた秋成の一つの資質であるといつてよいものであろうし、この形式をかりることで自己の批評意識を開陳しようとしたことのあらわれであると考えられるであろう。問答形式ということをはなれば、特に晩年の春雨においてはこうした要素は多々指摘できることであり、よくも悪くもそのことは秋成の執筆上の方法意識の一翼をになつていたとは言えそうである。

三

前段においては出典の問題を考察してきたが、ここからは本篇の構成に就いて論旨の展開を追いながら、もって作品の意図を中心の問題点を考えていきたい。

まず第一段では常山紀談の記述と一致する形で左内が紹介されて

おり、先述の馬取の中間のエピソードを介在して第二段で精霊が出現する。すなわちこのエピソードは精霊出現の形式的動機として用いられたのであり、物語としての内的動機は

十にひとつも益なき閑談ながら、いはざるは腹みつれば、わざとにまうでて眼をさまたげ侍る。

と翁に語らせるところに設けられていたのである。この部分に関しては従来「大鏡」巻一の序に見られる「思しき事はぬは、げにぞ腹ふくるゝ心ちしける」、あるいは「徒然草」第十九段の「おぼしき事はぬは、腹ふくるゝわざなれば」といったくだりがその出典として指摘されてきたが、それはそれとして首肯しつつ同時に雨月の序に見られる

余適々有_二鼓腹之閑話_一。衝_レ口吐出。

との関係にも注目したいと思う。「鼓腹之閑話」としながらもそれは「衝_レ口吐出」されるものであり、ここに雨月全体に共通して貫流する作家の内的執筆動機が示されていると考えることもできようし、その限りにおいては本篇でも

今夜此_{こよのい}憤_{きはき}りを吐_{はき}て年_{としご}來_{ころ}のこゝろやりをなし侍る事の喜しさよ。

として精霊出現の根本理由が示されており、ここに見られる「憤り」こそはひいては雨月各篇の怪異出現の共有の論理をも提示していたと考えることができるのである。この「憤り」はまた先にあげた秋成の物語論ともいべき「ぬば玉の巻」において

文は憤りより書きもするものにいふよ。

とあり、秋成にとつての最大の執筆原理となっていたと考えられるのである。ここでいう「憤り」はいわば状況と個体との間に生ずる大きな齟齬として個体の側から発せられるような形で雨月全体を貫

流する共通した主題概念であることとらえることができようし、また晩年の春雨物語においてもこの点では基本的にはほぼ同じ意識がもたれていたであろうと思われる。田中俊一博士は「そらごと」を客観的形象理念、「憤り」「直き心」を主観的形象理念としてそれぞれとらえておられるが、このように見てくる時「貧福論」は一方で經濟論の形をとりながら、同時に雨月物語における方法意識を比喩的な形でここに開示していたと見ることができはしないであろうか。またそうであるからこそ本篇が巻末に置かれ、秋成はこの「憤り」の観点からの再読を讀者に要求したのではなかったか。

第三段では左内の問いが中心であり、それは集約すれば

多し
今の世にとめるものは、十が八つまではおほかた貧酷殘忍の人の言葉に求められるであろうし、これに続く左内の疑問も基本的に

は英草子第三卷に展開された論旨とほぼ基を同じくするものでもあった。こうした点に秋成の英草子に対する強い対抗意識がうかがえようし、これに対する秋成流の解釈を以下に黄金の精霊の口をかりて示していくのである。

続く第四段では先の左内の問いをうけて精霊の貧福の論が展開されそれはそのまま本篇の中核的部分を構成している。最初には仏教批判がもってこられるが

富と貧しきは前生のよきあしきによるとや

の問いに対して、仏教そのものではなく、もっぱら仏教の世俗的なあり方に対して論難が加えられているのであり、この点では春雨とも共通したものであろう。またここで二人の間答形式による論理展開のあり方は、左内の人道的通念にとらわれた立場から問いを

発するのに対し、精霊はその論理を人倫とは全く別の次元に置くことが強調されており、すなわち
我今假に化をあらはして語るかたといへども神にあらざる佛にあらざるも非情ひじやうの物なれば人と異なる慮あり。
に見られるごとく（ほぼ同趣旨のことがもう一度くり返され再確認される）人倫とは別の論理のありどころにその主眼が置かれていた。

このくだりでは人為的な倫理、あるいは規範に対して秋成流の徹底した批判意識が黄金の精霊の口をかりて展開されており、人倫をあくまで絶対化しようとする体制の論理・認識に対して、人倫ではない別の論理・方則のありうることを経済論の形をその喩として提示しているのである。もっともこうした考え方自体も、これまた基本的にはその発見においてすでに英草子において、

世の中の事、何事も天命に非ざる事なし。命の裡にある事は、求めずして自然に至る。命の裡に無きことは、精神を勞しても至らずと知るべし。其の身天に対して、是非を論ずべきに由なし。

と、天命としてとらえていたものであるが、ただ英草子が別の論理のありようをとらえながらも、それを天命として認識しようとしたのに対し、秋成のそれはより彼自身の現実感覚に根ざしたものであり、同様に貧福論の意図も人為では裁量しがたくともそれ個有の論理の別に存することを証明してみせるといった点にあったのであったのであり、この点に英草子の認識から一歩進んだものが認め

られるであろう。ただそうでありながらも

いにしへに富る人は天の時に合ひ地の利をあきらめて産を治めて富貴となる。これ天の随なる計策なればたからのこゝにあつても天のまに／＼なることわりなり。

として、言葉としてはやはり天が用いられているのであり、ここにある意味では一つの限界性をも同時に有していたとも言えるであろう。

貧福論に見られるような別の論理の存在といった視点は胆大小心録においても狐狸や樹霊といった自然界の持つ人関以外の「生」の論理の発見が再三くり返されており、これらとも共通性を持つものであろう。

さてここで精霊の論旨にたちかえれば

富貴のみちは術にして巧なるものはよく濼め不肖のものは瓦の解るより易し

と、富貴にいたる方法としては「術」にこれを求めるといった徹底した合理性にそれは帰着する。近年とみに注目されているところでもあるが、「阿刈菴」に見られるような宣長との日の神論争などにおいても、秋成にとっては宣長が神とあがめた「日の神」に対しても、倫理的なイメージが極力そこから払拭されており、それがきわめてある意味では即物的にとらえられていたことなどからも、秋成の資質としての一見神秘主義的な傾向とはまた別に、同時に自然認識に対するきわめて合理性に富んだ一面をもそれは示しているであろうし、ただその合理性のあり方に個性なり特異性が求められるようである。そしてそうした観点からするとここで展開されている徹底した合理性と、また雨月各篇をおおう一見した不合理（幻想

性)とはかならずしも秋成自身にとつては異質で相矛盾するものとはいえないのではないかという仮定が成り立つ。むしろそこに認められる個有の論理といったものは、他の諸篇においても人間の執念が様々な形で抽象され、実体化されて描き出されたものであつて、それぞれの主人公達と彼等の置かれた現実状況あるいは秩序との異和が、それぞれの形で物語の基本的なモチーフとなつており、その指定そのものは理不尽なものでありつつも、彼等例えば崇徳院にとつては自身に個有の論理をあくまで貫き通そうとするものであつた。そしてそのように見てくるならば本篇は雨月物語の小説作法あるいは発想契機を示すカギであると考えられることもできそうである。なおそのものに個有の論理の提示という点に関しては、とりわけ「蛇性の姪」との類縁性が大きいように思われる。

最終段は末來記の体裁をとりながら戦国武将論、歴史論が展開されているが、ここでも「富貴をもて論ぜば」という形で非精の論理においてそれが語られ、またその後の歴史はこの非精の論理の正しさの実体的証明として用いられている。ここでの時代設定は秀吉の治世下に置かれているのであるが

今の^{さき}麻にては長く不朽の政にもあらじ。誰か一統して民をやすきに居らしめんや。又誰にか合し給はんや。

との左内の間に精霊は信玄、謙信、信長、秀吉を次々と論じた後今豊臣の政久しからずとも、萬民和はしく、戸々に千秋樂を唱はん事ちかきにあり。

として

堯けう蕞めい日ひ杲こ百姓ひやくしやう歸き家け

の一句を示すのである。ここでの論中の秀吉に対する秋成のとらえ

方は胆大小心録に見られるそれとも呼応するものであり、そのかぎりでは一応矛盾は認められないといえよう。ただし、かといつて百姓の句が民は家康に帰属するとの暗示とのみ考えるのもまたいかなるものであろうか。たしかに形式上はそのようになってはいるであろうし、当時の出版界の通例として巻末に治世の太平をことごとくといったこともあつたであろうし、そうだとすればこの句をわつて雨月物語全篇がほぼ終わることからもそのように考えておくことのほうが自然であるのかもしれない。そうして秋成には現体制そのものを直接的な政治意識において批判したものは認められないが、またかといつて礼讃しているものもないと思われる。ただ百姓の句からは大坂冬の陣のきっかけとなつた方広寺の大仏の鐘に銘まれた「国家安康 君臣富樂」が連想されようし、あるいは秋成は幕藩体制に対する批判意識から少なくとも心情的にはむしろ秀吉に加担していたのではないかと考えられるのである。このことに関して中村博保氏は板本のさし絵の精霊が桐の紋をつけていることに着目しておられるが、さらには胆大小心録に登場する黄金の精霊が同様

に
隠者大にはこりて、いよく清くせんとして、すりみがきて見たれば、黄金なり、豊公の桐の紋をゑりつけたり。(傍点筆者)

と桐の紋をつけていることにも注目したいと思う。もつともこの期の秋成は金そのものにはむしろ否定的であり「悪なり、錢の精は善なり」としているのではあるが。またさらには「豊太閤を祭る」において

天の下拂ひ清めて四つ^注の海の外さへ照らす豊國の神。

難波人濱に刈る藻の打靡き、かよりかくより忍ぶ昔を。

とする豊富氏礼讃とも思える歌を詠んでゐるし、このことと本文の記述「今豊富の威風四海をなみし」とは一致していることなどを考へれば、末尾の句にこめられた意味も単に徳川氏の治世礼讃とはいがたいようにも思われるのである。もっともここで展開されてきた命運(あるいは命録)の論理にしたがうならば、現実はその治世の続いている徳川氏こそは、すくなくとも人論には関わりなく、ともかくもそうした命運を持つてゐるはずなのであり、またそのことを肯定しなければ本篇の構想そのものが根底的な矛盾にさらされることになるであらうし、したがって末來記の形をとりつつも秋成にとしての現実はいくまで現実として受容されねばならなかったのである。つまりそれは「ぬば玉の巻」にも見られるごとく

作者の思ひ寄する所、あるは世の様のあだめくを悲しび、あるは國の費えを歎くも、時の勢のおすべからぬを思ひ位高き人の惡^{たぐ}みを恐れて、古の事にとりなし、今のうつゝを打ちかすめつゝ、あくまで現実を認識しつつ、それに対する批判意識を「憤り」としてはねとしながら「そらごと」において語るといった方法意識が自覚されていったのであり、本篇もまたこうしたあり方に即していたということができよう。

四

最後に貧神論と春雨物語との関連について述べておきたいが、これも早くに重友毅氏が、具体的には示されなかつたもののその方法の関連性を示唆されていたものである。ここでは特に貧福論の最後に置かれた歴史論との関連において見ていきたいと思うが、そこでとりあげられた武將達はそれぞれの器量とは別に一種の命録に支配

された存在としてとらえられていたのであり、もっともここではそれは精霊の論理の証明として機能していたのであるが、一方個人の個我とは別に偶・不偶といった考え方が歴史と人間という大きなテーマのもとに構想されたのが春雨物語であった。特にそうした点からは「天津乙女」がこれを如実に体現し、いろこのみによって政治的状况の困難性の中を游泳し、僧正にまでのぼる良峯の宗貞と、逆に自己の信をあくまで貫き、道鏡の陰謀を打ち破りながらもついに容れられることになつた和氣清麻呂との対比の中に「命録」あるいは「偶・不偶」といった形象性の契機が認められるのであり、さらには「海賊」においても管広が同様の基軸からとらえられていたのである。

このように見てくる時、「貧福論」は春雨物語においてとられた方法的特質を集約的に関示してみせるとともに、後年の春雨物語につながるあらたなる方法的可能性を持った作品であると評価することができるよう思われる。

注(1) 重友毅「秋成の研究」文理書院

(2) 勝倉壽一「雨月物語構想論」教育出版センター

(3) 以下本文の引用は重友毅校注「上田秋成集」朝日新聞社による。

(4) 鶴月洋「雨月物語評釈」角川書店

(5) 前掲「雨月物語評釈」

(6) 藤井乙男編「秋成遺文」図書刊行会

(7) 田中俊一「上田秋成文芸の世界」桜楓社

(8) 中村幸彦校注「英草子」小学館日本古典文学全集所収

- (9) 先掲「雨月物語評釈」解説
(10) 先掲「秋成遺文」所収
(11) 先掲「秋成の研究」

(本学講師)